

# 教職大学院 Newsletter

# No. 50

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2013.3.2

巻頭言〈特別寄稿〉

教職大学院 Newsletter No.50 記念号の発行に寄せて

## 新燃岳の麓から新たな教員の養成を目指して

南九州大学人間発達学部学部長 黒木 哲徳

(元福井大学教育地域科学部長)

ニュースレターを通して福井大学の教職大学院の着実な歩みを拝見することは、少しかかわりを持った者としてはうれしい限りである。かなり古い時代になるが、大学改革の委員の一人として、大学院の学校改革実践研究コースの設置に関わり、引き続いて、それが母体となった今日の教職大学院の設置にも学部長として関わらせていただいた。最初のコースの設置では、当時の文科省の石井室長自身が“拠点学校”構想に近いお考えを持っておられた。時間はかかったが、実現は室長の決断を待つのみであった。むしろ、この改革での困難さは、学内での教科専門や教科教育の担当者の方々の協力という点にあったが、今では昔話で済むことかもしれない。いずれにしても、新たな1ページを切り開くには莫大なエネルギーと時間がかかるが、それが決して無駄ではないことの証左であろう。

私自身は、数学の研究者という立場からスタートして、いつの間にか算数・数学教育という習わぬ経を読む門前の小僧になってしまっ

た。福井大学の在職中は、学校教育の現場も教科教育も、いずれも新たに学ぶべき対象であり、同時に研究の対象でもあったが、幸い良き仲間にも恵まれた。古いしがらみに縛られることなく教育・研究や改革に取り組めたのは、もともと数学という学問を研究対象としていたことが大きいと考えている。「数学の本質は自由にある (Das Westen der Mathematik ist ihre Freiheit.)」と言ったのは、集合論の創始者のゲオルク・カントールである。数学の持つ自由の精神は、新たなモデルを構築し、検証し、また変

## 内 容

巻頭言〈教職大学院Newsletter No.50記念特別寄稿〉

黒木 哲徳 (南九州大学人間発達学部学部長) (1)

林 雅則 (福井県教育委員会教育長) (3)

八木誠一郎 (福井経済同友会代表幹事) (4)

特集：福井大学教職大学院〈これまで〉と〈これから〉(5)

篠原 岳司 大橋 巖 滝 民恵 青柳 宏治  
北島 亜実 松本 敏 松木 健一

長期実践研究報告会に参加して (11)

福井大学教職大学院 長期実践研究報告書一覧 (14)

平成25年度福井大学教職大学院 年間計画 (第1次) (19)

報道ファイル (日刊県民福井より)

現場拠点の教員教育「福井方式」全国に拡大 (20)

革していくことへの勇気を与えてくれたような気がする。

いまは、新燃岳の噴火で一躍有名になった霧島山系の麓に広がる島津藩発祥の地でも知られる都城という小さな市にある南九州大学で、新たな小学校教員の養成に挑戦している。2010年に、附属学校すら持たない農学や栄養学系の小さな大学に、教員養成系の人間発達学部子ども教育学科が、都城市と公私協力で誕生した。幸い、設置の当初からかわり、小学校教員養成の新たなモデルを構築するチャンスに恵まれた。助手を含めても16人しか教員がいない上に（保育士も幼稚園教諭も養成する）、附属学校がない大学でどうやって教員養成をやるのかを考えた末、福井大学の改革のアイデアを使うことにした。弱点を逆手にした取り組みとして、“連携拠点学校園”方式を導入した。都城市と隣町の三股町の教育委員会と連携協定を結び、6つの小学校と4つの幼稚園を拠点学校園とすることができた。それを実効あるものとするために、学部に「子どもの学び研究所」という附属研究所を設置し、これらの学校と幼稚園から研究員を一人ずつ派遣してもらい、月1回の研究会を開催することとした。この方式により、教育実習時だけでなく、常時地域にある学校現場と繋がる仕組みができた。また、この研究会を利用して、学生に対しては学校教育や児童のかわり方を指導してもらおうこととし、これらの指導を通して、学生がボランティアとしてこれらの学校へ関わるのが可能となった。このボランティアは子ども支援地域活動という科目の単位に換算される。顔の見える学生の指導に関わっていただくことで、学校現場との信頼関係もできてきた。2年生では観察実習をやり、始業時から終業時までこれらの学校に3日間通い、観察日誌は大学に帰って書き、担当の大学教員が夜遅くまで省察的指導をする。さらに、3年次の11月に行う教育実習は、母校実習では

なく、連携協定により都城市と三股町の小学校で行う。3年生の4月に実習先の学校を発表し、学生は5月から月一回の割合で、自分の指定された学校に出かける。その時点では、自分が世話になる学級と指導教員が決まっており、学級の子どもとふれあいながら指導も受ける。また、11月の実習時の研究授業（算数または国語、道徳）の単元も指示をもらっており、大学側の教員は研究授業の教材指導、指導案の指導、徹底した模擬授業なども行う。こうして、学校現場サイドと大学側が協働して学生指導を行う仕組みが出来上がってきた。学生は、学級の子どもたちの名前も覚え交流もでき、指導案も書けるようになっていく中で、11月の教育実習を迎える。教育実習の3週間が学生の成長を支える実効性のあるものとなった。この方式は、学校現場の先生方から“南九大方式”と呼ばれ、非常に好評である。また、各実習校の校長先生からは“これまでにいろんな大学の教育実習生を受け入れてきたが、こんな質の高い実習は初めてだ”とか、“このような実習ならば大歓迎である”という評価が寄せられた。実際、格段の成長の姿が見られ、実習が終わった後からも、学校からのいろんな要請に学生が向くことが増え、教育現場と協働した年間を通しての実践力の形成が実現できる形になっている。

まだ、卒業生の出ない創設3年目の学部・学科であるが、地域と連携した教員の養成という新たな試みが、少しずつ知られるようになってきている。昨年の12月には、鹿児島県の曾於市から連携協定を結びたいという申し入れがあり、いよいよ25年度からは県境を越えた地域連携による教員の養成が始まる。

また、25年度からは特別支援教育の課程も認定された。

完成年度までという約束で関わって来た私にとってもいよいよ最後の年度となる。

# 「養成」「採用」「研修」の一体的な体制の構築

福井県教育委員会教育長 林 雅則

福井大学教職大学院が設置されて5年が経過し、「Newsletter No.50」の発刊に当たり、改めてこれまでの革新的で継続的な取組みに対して敬意を表します。本年3月までに合わせて69名が修了する福井県からのスクールリーダーコースへの派遣教員は、県内各地で、学校経営、授業改革、教育行政等に力を発揮しており、感謝申し上げます。

今や全国の教師教育のモデルともなっている「学校拠点方式」は、一般的にイメージされている知識伝達型、個人研究型のこれまでの大学院教育の在り方を抜本的に変えてきました。

Newsletterを読むと、普段通り学校で教育活動が続けながら大学院生になるという斬新な取組みの中に、実にきめ細かい仕組みが用意されていることに気がきます。

毎月の「合同カンファレンス」では、若手に対するアドバイスがそのままベテラン教員の成長につながっています。また、普段はあまり読めない優れた学術書や実践記録をじっくり読んだり、専門的な講義を受けて語り合ったりする夏季休業中などの集中講座への参加や、長期的なスパンで自己の実践の意味を振り返る「長期実践報告」作成により、実践と理論を深く結び付けています。そしてこれらのことが、大学教員のアドバイスのもとに、世代や校種を越えて重層的に進められ、持続的なサイクルを生み出しているのです。

教育行政の役割は、学び続ける子どもたちと教員をサポートしていくことに尽きます。本年度福井県は、教員採用選考試験の方法と内容の変更、

採用前研修の充実、授業名人の拡充等、教員の資質向上に関する制度を大きく変更してきました。研修においても、「ミドルステップアップ研修」の大学院との協働企画、協働実施が実現しました。さらに、大学院の協力を得て校内研修の指針となる「学校全体の教育力向上に関する指針」を策定し、教員の学び合うシステムづくりを提案しました。これらの理念も教職大学院の学びと共通するものであり、協力体制の賜物と考えています。これからも、一層、教育委員会と教職大学院が連携を密にして、日本の教師教育のモデルとなる福井県として同じ方針のもとに「養成」「採用」「研修」の一体的な体制を築いていきたいと考えています。

Newsletterの果たす役割は非常に大きいものがあります。院生は学校にいながら他の院生や他県の研究者等と情報を共有できると同時に、実践紹介の場ともなっています。県教育委員会「学力向上センター」でも教育委員会と学校をつなぐ教育情報誌「明日への学び」を毎月発信しており、両者が情報を共有していくことで一層の効果が期待できます。

今後、教職大学院にお願いしたいことは、「学校拠点方式」の実態をより第三者に具体的に理解できるような広報活動の工夫と、授業力向上に不可欠な教科専門の力量向上です。教職大学院の学びをベースにこれらのことが分かりやすく可視化されると、説得力もより高まると思います。今後の更なる刷新を期待します。

## 教職大学院ニュースレターNo.50記念号発行に寄せて

フクビ化学工業株式会社代表取締役社長・福井経済同友会代表幹事

八木 誠一郎

私は大学生のある時期をアメリカ オレゴン州ポートランドで過ごした。当時のポートランドは、全米から集まる穀物類の積出港として有名で多くの日系商社が支店を設けていた。家族単位で渡米してきた彼等は子供が日本の教育から遠ざかることに不安を感じ、商社会が中心となって日本人学校を設立し毎週土曜日に国語と算数の補修授業を行っていた。そのような中、懇意にしていた方から、教員に欠員が出て授業が回らないから手伝ってくれないかとの話があり、教師の何たるかも全く分からないままに3年間教壇に立った思い出がある。「先生」と呼ばれる時の気恥ずかしさが最初は常に付きまとった。自分は彼達に先生と呼ばれる資格はあるのだろうか。授業は、こちらの言いたい事や教えなければならない事を一方的に伝える場ではなく、その一つ一つを通して子供達の興味の扉を開けさせる、或いは何か一つのキーワードが端緒となってイメージーション力を拡げていく事が大切であると分かるようになるにつれ、己の知識不足や経験不足を如何に補うかを考え、他の先生や或いは保護者の方々に教えて頂きながら授業を行った。親の仕事の都合で人種も文化も言語も違う異国の地に否応無しに飛び込まされ、言葉を憶え環境に慣れようと努力する子供達の心情、日本に戻ると直ぐに受験を含めた厳しい勉強の環境下に強いられる子供達を不憫に思い少しでも日本式勉強をさせたいと願う親の気持ち、その双方の思いを感じながら教壇に立ち必死で授業を行った。思い返せば、結局は自分が一番学んだ時期だったかも知れない。

福井経済同友会「人づくり委員会」は、平成19年1月に「21世紀を支える知識基盤社会構築の為に教育環境の再構築を福井から実現する」と題し、教育インフラの現状を打破し新たな教育者教

育システム創造に関する提言を纏めたが、その要旨は郷土福井に誇りを持ち、地域の担い手となる人づくりの為に教育界における「先生づくり」と経済界における「親づくり」の双方がベクトルを合わせながら推進して

いく重要性を強く唱えている。爾来、福井大学教職大学院が建学の理念を具現化し実践してきた教職大学院と県教育委員会による学校拠点方式の取り組みは、先の中教審答申の教員養成と研修の一体化とそれに伴う教職大学院の拡充に向けた提言の随所に福井方式として反映されたことは記憶に新しく、これまでの関係各位のご努力に心から敬意を表したい。社会構造が大きく変化し、好むと好まざるとに関わらずグローバル社会で経済活動を進めていく現在、次世代の継承者達にはどのように社会と交わり役に立っていきたいのか、或いは他の人とは違う何をやりたいのかなど様々な命題に苦しみながらも自らの力で能動的に探し出していく力、所謂「人間力」の涵養が大切であり、福井大学教職大学院の担う役割は更に重要になってくることは間違いない。

福井経済同友会も同様に人づくりに果たすべき役割と責任をしっかりと自覚し、今後も引き続き教育界との対話と連携を深め誇れる郷土福井を担う継承者の育成に鋭意取り組んでいく所存である。



## 福井大学教職大学院 〈これまで〉と〈これから〉

滋賀県立大学人間文化学部人間文化学科 准教授 篠原 岳司

(2010年4月から2011年3月まで本学教職大学院に機関研究員として在職)

2011年10月、滋賀県大津市で中学2年の男子生徒がいじめを苦に自殺する痛ましい事件が起きた。2011年4月に福井から滋賀へと職場を移した筆者にとっても、この事件は研究者としての自らの役目を再認識させる大きな出来事となった。現在は滋賀県知事を本部長とする「いじめ対策研究チーム」の委員となり、他の実践者、研究者の方々と共に県内子育て・教育の課題をあぶり出し、その根本的な改革に向けて、短期的および中・長期的な対策を検討し始めているところである。

本事件は、大津市教委および当該学校による事件後の対応の問題もあり、教育界全体への強い不信を世間一般に拡大させる結果ともなったが、そうした批判とは別に、教員の労働状況の困難さや組織的な課題、それに関わる教育行政施策の矛盾など、現在の学校組織が抱える困難を改めて明らかにすることとなった。本事件の事実解明に取り組んだ「大津市立中学校におけるいじめに関する第三者調査委員会」による「調査報告書」（2013年1月31日）は、学校側の問題として、教員組織の連帯の希薄さ、特に自死生徒の担任の孤業の実態、そしてその要因の1つである学校の大規模化（2013年1月現在で全校生徒数879人）等を指摘している。確かに当該生徒の担任がいじめの事実を認知せずに適切な対処をとれなかったことは重大な問題に違いなかった。しかしながら、その担任の教育実践上の悩みや困難が組織の中で十分に支えられず、またいじめに気づいていた学年の教員との情報共有や対応協議が充分になされないなど、学校組織において改善されるべき点が複数存在していたことにも目を向けなければならない。

それと同時に、そうした組織問題の背景となる学校の大規模化や教師の多忙状況を改善すべく、教育行政が取りうる条件整備についても指摘しなければならない。まさに待った無しの状態まできている。

このような今日の学校が抱える困難に対し、福井大学の教職大学院が追究する学校改革の理念には大いに期待をしているところである。学校拠点方式による大学院教育を柱とし、教員の教育実践の協働省察を支える多重多層なコミュニティを学校内外に創造、拡大させていくその理念は、困難に喘ぐ中でもそれを乗り越える教員一人一人の主体性の開発を促し、学校の組織としての教育機能を振り返り、高めるものとして重要な意味を持っている。今後の改革の中でも、「子どもの権利条約」に謳われる「子どもの最善の利益」を保障し、学力保障にとどまらない子どもたちの成長と発達、そして社会的な自立を十全的に支えるために、子どもの現実から出発する教育実践研究を、学校現場と大学と行政との協働によって積み重ねていかなければならないだろう。

筆者もまた、このような福井の実践研究のコミュニティのますますの発展を、ただ外側から期待するばかりではない。引き続きそのコミュニティに参画させていただき、自らの専門である教育行政学の立場からも実践研究を追究し、共に学校改革の実践の身を投じたい所存である。福井を去って2年になるが実は未だにそんな気がしていない。これからも滋賀と福井を行き来しながら、研究者としての自分の現在・過去・未来を、絶えず間なく省察し続けていこうと思っている。

福井市森田中学校 教頭 **大橋 巖**  
(スクールリーダー養成コース第1期生)

私が教職大学院で学んだことは、『読み・書き・そろばん』ならぬ、『読み・書き・語る(聴く)』ことの大切さである。まず、教育に関する原著論文を心ゆくまで読みふける時間が保障されていた。日頃は忙しさにかまけて、教育書などほとんど手に取ることもなかった。たまに目を通すものと言えば、いわゆる授業のためのHow to 本ばかりであった。特に在学中に読んだ、『コミュニティ・オブ・プラクティクス』(エティエンヌ・ウエンガー他著)からは、協働研究の組織・方法の改革という観点から多大な示唆を得た。次に書くこと。実践の架橋理論を検討したり、実践記録を読み解いたりするためのレポートの作成。そして、これまでの教員人生を振り返りながら、今後の自己の展望を切り拓くために記述した『長期実践報告』。今読み返してみても、書くたびに成長していく自分を発見することができる。最後に、実践レポートを持ち寄り、少人数で語り合う場の保障。特に多様な人々と実践を交流できるラウンドテーブルは印象的であった。互いの実践を語り合い、他者の言葉に耳と心を傾ける時間。他者に語ることで、自分の実践の意義が明らかになっていくことを感じる事ができた。

これからの子どもたちが生きていく21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような社会においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見出し、解決するための思考力・判断力・表現力など、いわゆる「生きる力」が必要となる。しかも、知識・技能を、陳腐化しないように常に更新する必要がある、生涯にわたって学び続けることが求められており、学校教育はそのための重要な基盤となることが求められている。しかし、より重要なことは、子どもたちばかりでなく、学校教育の現場に身を置いている私たち教師にも、「生きる力」が求められているということだ。思考力・判断力・表現力は、教職大学院での『読み・書き・語る(聴く)』過程の中でこそ培われていく。

さて、教師の成長にとって不可欠な『読み・書き・語る(聴く)』ことを、教育実践の場で保障したいと考えている。管理職となった本年度、その実現を模索する一年となった。

## 学ぶことは自己変革～教師の協働と学び合うコミュニティ～

福井県立美方高等学校 教諭 **滝 民恵**  
(スクールリーダー養成コース第3期生)

平成21・22年度の福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースでの学びは、自分自身にとってまさに自己変革の2年間であったと思います。教職大学院入学直後、ご指導いただいた長谷川義治教授と共に京都市立堀川高等学校へ視察に行き、探求型の授業改革を中心に学校運営が進められていることを荒瀬克己校長先生からお聞きしたことから、私の大学院での学びが始まりました。特に、授業の中で生徒の学びに寄り添うこと

の意義と、高等学校で教科の枠を越えて授業研究会を実施することの意味について深く考えることができました。平成21年度に参加した研究会の中で、フィンランド・オウル大学副学長ペンティ・ハツカライネン氏から、フィンランドの教育についての講演をお聞きしたことが非常に印象に残っています。また、修了後の平成23年度にはラウンドテーブルにおいてポスターセッションや分科会の中で、美方高校の取組をプロジェクトチームメン

バーとともに発表させていただき、参加されている方々から質問やご意見をいただく中で、学校の枠を越えて深く学び合うことができました。プロジェクトチームの会議は放課後、勤務時間を越えての実施でしたが、いつも、時間を忘れて語り合い、学校を良くするためという大前提のもと、心をつなげる仲間と共に楽しみを持って取り組むことができましたと思います。

そして今、美方高等学校には様々な実践コミュニティの存在があることを実感しています。また、今年度は、「授業力向上、生徒の学び」という視点から、管理職が率先して全ての教員の授業参観をしたり、お互いに研修し合ったりする中で、生徒の「主体的・意欲的な学び」を大切にしてきました。教師の協働という視点から見ても管理職の存在の大きさを実感しています。また、以前にも増して美方高等学校の学び合う学校文化や風土ができていないのではないかと感じます。

このように学校改革に向けて実践していく時に、あらためて福井大学教職大学院における定期

的なカンファレンスによって支えられ歩んでいくことができたからだと思います。特に、「傾聴」、共感的に聴いてもらえることによって、自分自身のこれからの実践の励みとすることができました。途中で事実や課題について尋ねたり、問い返したりすることで、世代、学校種を越えることの意味を見いだすことができ、この合同カンファレンスをきっかけに理論と実践の架け橋ができました。また、福井大学教職大学院の中心に据えられている実践研究、美方高等学校を拠点に新しい授業づくり、学校づくりのために大学院の先生方と協働して進めることができたことが、実践の礎となっています。

高等学校と教職大学院との連携が、自校の授業改革・学校改革に関わり、自分自身の教育力を高めること、自己改革につながってきました。今後とも福井大学教職大学院が福井の教育を牽引する存在であることを大いに期待しています。

## 教職大学院での学びの価値

坂井市立春江小学校 教諭 青柳 宏治

(教職専門性開発コース第1期生)

「今の自分の現状は？」と自分自身に問いかけると、頭に浮かんでくるのは「試行錯誤の真っ最中」ということです。教職大学院を修了し、希望に胸を膨らませた私に待っていたのは、怒涛のように流れゆく毎日でした。日々の授業の準備、毎日何か起こる教室、日々表情を変える子どもたち…。何かに追われ何かに焦り、バタバタと過ごし、終えてしまった日々のなんと多かったことか…。

正直に申し上げて、「自分は甘かった」と感じています。今現在の私自身は、自分の理想とは程遠く、学級経営、授業実践、生徒指導のどれをとっても満足のいく実践はできていません。これが今の私の教師としての力量だと思っています。

しかし、そんな私ですが、現状を悲観はしてい

ません。なぜなら、日々の実践に迷い、もがきながらも、自分自身の「授業で子どもを育てたい」という、理想とする教師像が明確にあるからです。それは、一朝一夕にできたものではありませんでした。院生時、子どもが日々成長する姿や現場の先生方の「生」の実践に触れ、様々な立場の先生方のお話を伺う中で土台をつくり、同じ院生や大学の先生方との議論の中で練り上げていったものです。

そう考えると、大学院時代の環境は本当に恵まれていたなと感じます。2年間じっくりと自分の実践を省察することで考えを深め、様々な先生方との対話によって視野を広げることができたのですから。

現場に出た今でも、ラウンドテーブルは、私に

とって非常に重要で、かつ、とてもわくわくする時間です。普段お話しすることのできないような方々のお話を伺ったり、自分の実践を聞いていただけたりするからです。こんな機会でもなければ、自分の実践をじっくり見直すことなんてできないかもしれません。実際、自分の実践を発表させていただいた際は、学部生の方の指摘に「はっ」としたり、ある校長先生のアドバイスに「なるほど!」と納得したり、異業種の方の考え方に共感したりと、いつも本当に勉強になることばかりです。

だからこそ、ラウンドテーブルのような「語り合い、学び合う場」を今後も開き続けていただき

たいと切に願います。私のような発展途上の教師にとって、ラウンドテーブルは刺激に満ちた学ぶ機会であり、自分の実践を見つめ直し、次の実践につなげる大きなチャンスでもあります。

このように、教師としての私の土台をつくってくれた福井大学教職大学院の取り組みは、今の私にとっても、自分の力量を高めるために本当に重要なものであることに変わりはありません。福井大学教職大学院の取り組みに携わっておられる先生方や、ラウンドテーブルで親交ができた先生方とは、これからも語り合い、学び合う「仲間」として、交流を深めていきたい。今強くそう思っています。

福井県立盲学校 教諭 北島 亜実  
(教職専門性開発コース第2期生)

福井大学教職大学院を卒業して早いもので丸2年が過ぎました。卒業して間もなく、緊張と不安の中で教員生活をスタートさせたことが昨日のことのように思い出されます。

現在、福井県立盲学校に勤務して2年が経ちました。視覚障害がある子どもたちとの学習では、教材作りなど大変なことも多くありますが、毎日子どもから教えられることばかりです。今年度は初めて担任を任せられ、クラスの子どもたちと日々向き合いながら学校生活を送っています。子どもとのやりとりの中で気持ちを分かりあえることもあれば、やりとりがなかなかうまくいかないこともあります。しかし、周りの先生方に話を聞いていただいたり、自分のかかわりを振り返り反省したりしながら子どもとの関係をつくっています。今でも大学院から続けている授業の記録を書き、自分の実践を常に振り返るようにしています。記録を書いていると、2年経った今でも教職大学院でお世話になった先生方、先輩、後輩や実践でかわった生徒を時々思い出すことがあります。

「院生のときあの子とかかわっているときも同じようなことあったな」とか「こういう場面するとき、あの先生ならどんな風にアドバイスしてくれるかな」とふと考えるときがあります。2年間という短い間でしたが、大学院でいただいた自分の実践に対するアドバイスや感想など印象的なもの

は、今の私の大切な糧となっています。

振り返ると卒業してから今まで、目の前にあることをこなすだけで精一杯の毎日で、大学院のゼミやラウンドテーブルにも参加できない現状です。教職大学院を外から見る立場に立ってみて大学院の取り組みがあまり知られていないことに気がつきました。また、私自身も今、教職大学院がどんな取り組みをしているのか分からない状態でした。大学院で学んだことが自分の現在の実践につながっているとは思いますが、それを勤務校以外の人に発表する機会をもっていないと反省しています。

この記念すべき50号の執筆を依頼されたとき、教職大学院は今どのような取り組みをしているのか知りたくなり大学のホームページを久しぶりに開きました。そこには、現職の先生方や後輩たちが様々なことを学び、教師としての力量を付けようと懸命に自分自身と向き合っている姿が写し出されていました。そこには、教師としての力量を少しでも付けたいと夢や希望を抱いていた2年前の自分と重なる部分がありました。執筆という機会がなければこのように今の教職大学院を改めて外から見る機会はなかったと思います。50号は私にとっても初心を思い出させてくれた特別なものとなりました。



# 全国の学び続ける教師を支えるコミュニティの中心に

宇都宮大学教育学部 教授 松本 敏

教職大学院Newsletter を初回からずっと送っていただけてきました。全国で20あまりしかないので、教職大学院を発足・運営するにはいかに多くの労力が必要か、容易に想像できます。さらに福井大学のそれが「学校拠点方式」という手間暇がかかる仕組みであることが分かっている私たちには、その運営の傍ら毎月このNewsletterを発行し続け、それが50号に達したということには、単なる驚きや賞賛を超え、畏敬の念を禁じ得ません。

思い起こせば、私が福井大学の皆さんと繋がりを持ったのは、2004年3月13～14日のラウンドテーブルでした。当時宇都宮大学の教育学部長だった中村清先生に連れられて参加しました。1日目の発表ではフレンドシップやライフパートナーなどで学生に深い体験学習を行わせている様子を知って驚きましたし、2日目のラウンドテーブルでは、一つの実践を2時間近くもかけてじっくりと聞き語り合うスタイルに出会って衝撃を受けました。そのとき小さなテーブルを囲んだ一人が社会科の向当先生で、そのご縁で福井大附属中の研究発表会にも何度も足を運ぶようになり、牧田先生たちの実践を知ったのでした。

3月のラウンドテーブルにはほとんど毎年参加してきました。遠い宇都宮からなぜそうしたかと言えば、教育学部のあり方、教員養成のあり方、教育現場との関係、等々について、毎回大きな示唆を受け続けたからです。その頃の私は、教免法の大改正に伴うカリキュラム改革に携わったり、現職教員の再教育に大学院教育学研究科を活用する改革（カリキュラム開発専攻の立ち上げ等）に携わったりしていました。2002年には評議員として学部のあり方や大学全体の改革を考える立場になり、国立大学法人化のために学内の委員会組織の再構築をする仕事をしていました。諸大学を訪問し、あるべき教師教育の姿をいろいろと模索する中で出会ったのが福井大学だったので。宇都宮大学教育学部が地域連携のインターフェイスと

してスクールサポートセンターを立ち上げたのは、その出会いの1年後でした。宇都宮での学校活性化フォーラムにも福井の先生方に何度も来ていただきました。

衝撃的な出会いのしばらく後になって、福井大学の取り組みの本当のすごさを知ることになります。福井大学教育地域科学部が、2000年8月の「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」の発足直後に「地域の教育改革を支える教育学部・大学院における教師教育のあり方」

（教授会見解）を採択したこと、2001年には「学校改革実践研究コース」を発足させ、「地域に根ざし開かれた教育・学術・研究の拠点としての教育地域科学部のあり方」を採択したこと、そして「在り方懇」報告の翌年「21世紀における日本の教師教育改革のデザイン」を採択し、在り方懇報告の問題点とそれに対抗する地域教師教育の拠点の意義を明確に示していたこと、などを私は後から知りました。そういう理論的かつ戦略的な思想がベースにあって、これだけパワフルな実践をなし得たのだということを改めて知ったわけです。

「記録」「再録」「読み返し」「書き直し」は、福井大学の取り組みのキーワードなのだと思います。教職大学院を作るまでの長い営みを、私は『学習過程研究クロノロジーⅡ b 1996-2007』という論文集から確認してこの文章を書いています。この論文集を編み続けてきた思想が、福井大学の教師教育の実践を貫く思想と通底しているのでしょうか。教職大学院における教育・研究の姿は、学び続ける教師同士の、読み返し書き直された記録の膨大なアーカイブになっています。

2012年8月の中教審答申に至る過程で、今後の教師教育の方向性が次第にはっきりしてきたとき、私たちは福井大学から大学間連携の提案を受けました。教職大学院の拡充と既存の教育学研究科のリニューアル、同時に教育委員会との連携強化。このような方向に向かわない手はないと、私たちは大学本部と共通理解を持って、2012年3

月、改革をスタートさせました。福井大学との大学間連携を締結し、教師教育改革コラボレーションの一員に加わりました。2013年1月の東京ラウンドテーブル（明治大学）において、初めて教師教育改革のゾーンを持つことができました。そこでも、この改革が新しい研究教育領域の創造という日本の教員養成史における一大画期であることが実感されました。今後、この輪の中で学ぶ院生同士の交流も深まっていけば、教師教育が外側から教員を供給し続けた時代を超えて、ついに自ら

の胎盤を形成することにつながるでしょう。

50冊の教職大学院Newsletterには、世界を見据えて地域に根を下ろした教師教育に関わった様々な人たちが登場しました。特にこの手間暇のかかる教育実践を支えている若手が輝いて見えました。そこがまた、福井の魅力の大きな源でもあると思っています。今後とも学び続ける教師を支えるコミュニティの全国センターとしてリードしてほしいと願っています。

## 学校拠点方式の明日

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 松木 健一

教職大学院の学校拠点方式が始まったのは、2000年から施行し2001年に正式スタートした学校改革実践研究コースからである。したがって教職大学院に先立つこと8年前ということになる。このコース名が示す通り、当時から教師の個人研鑽の大学院ではなく、学校改革のための大学院を目指していた。伝統的な専門職と違い、教師の専門職としての特徴は、組織人であるということであり、教師の力量形成は、学校という組織抜きにはあり得ないと考えていたからである。

しかし、この学校ベースの教師教育改革という発想は、（当時はそして今現在もそうかもしれないが）十分に理解されるまでに至っていない。

「学校拠点方式」という名称から、現職教員院生へのサービスとしての「出前授業」と誤解されている。あるいは一方で、「学校で行っているのなら、校内研修と変わらなく、大学のやるべきことではない」といったご批判も頂いている。これら誤解の原因は多分に「学校拠点方式」という名称に依るのだろう。あるいは、批判者がキャンパスでおこなう大学院講義か教員研修かの2つしか、教師教育の認識フレームを持たないことに依ると思われる。

本学の学校拠点方式では、学校において極めて实际的で個別的で具体的な教育課題を取り上げ、教師の協働的な省察的实践を支えるとともに、教師がその内容について徐々に認識フレームを変化

させ、より普遍的で広範に包括できる理論的枠組みに、自らの実践を再構築できるように教育課程が編成されている。したがって教育課程の編成にあたっては、教師自身の実践が日々の省察的实践から長期スパンの省察的实践へ拡張できるように工夫してきた。省察的实践を支える語りと傾聴のコミュニティは、次第に同僚から異学校種や異業種に発展する。さらに、実践研究に介在するモデリティも、授業参観や日々の実践記録から、長期の実践報告書やいわゆる理論書にも及んでいく。これらが、学び手や学校の年間のリズムに合わせて組み立てられているところが、本学の教育課程の特徴である。

この教育課程の帰結は、長期実践報告書作りと、本学が「ラウンドテーブル」と称してきた広範な公共空間での交流である。つまり学校拠点方式は、一都道府県一大学の範囲に留まっていたは、完結できない仕組みなのである。今世紀の教師教育改革は、学校にしっかりとした足場を置きながら、その一方で、実践で見出した課題が全国規模で再検討されていくようなネットワーク構築が重要である。

本学の学校拠点方式の明日は、全国規模で大学間・教育委員会間での協働を実現し、教師教育の質保証を実現する組織を構築することであろう。まだまだ道のりは長い。

February

## 長期実践研究報告会に参加して

## 「長期実践報告会」を終えて

スクールリーダー養成コース2年／福井県教育研究所 金森 誠

2月16日、長期実践の報告会が行われた。当日朝、早めに会場入りし、発表の下準備に取りかかっていると、早々に集まってくるメンバーはM2（スクールリーダー）が中心であった。口々に、「おはようございます！」のあとに「ようやくここまでたどり着いたね」との言葉が出る。皆が笑顔を見せ、安堵感や充実感に満ちあふれた表情をしているように見えた。

私自身も「ようやくここまで来た！」と「自分でもできた！」というのが今の一番の感想である。小学生の頃から作文が下手と言われ続け、高校では文系に属しつつも国語が苦手なために理転。文章を書かなくてもよいのが理科教員の既得権だと勝手に決めつけて今まで過ごしていたようなものである。そんな自分でも書きあげることができた。小学生が読書感想文を書いて先生に褒められるのと同じような喜びを、この歳になってはじめて感じる事ができたような気がする。

当日のテーマは「長期にわたる実践の営みを語る／聴く」。サブテーマは「語り手／聴き手の省察に向けて」である。長期実践を書き終えた我々M2にとっては、自分の実践を語る時間であるが、M1の方々にとっては一方的に聴くだけでなく、疑問点等の質問や、感

想を語ることを通して、自分の実践を振り返る時間となるべきであろう。そう考えると、与えられた時間のすべてを使った一方的な報告にならないように注意しなければならない。

この時、本所の研修受講者の気持ちが理解できた。本所では今年度から初任者・5経年者・10経年者でのクロスセッションという場を設定している。これは限られた時間の中で、年間を通した実践を語り合う場である。その受講者から、「せつかく書き上げた自分の実践報告を『全部語りたい!』気持ち、聴き手に『分かりやすく伝えたい』気持ち、討議時間の確保のために『報告は簡潔に』との意識が頭の中で交錯し、上手く報告ができず、悶々とした」との声を聞いていた。この日の私はまさにその通りの状況に陥っていたのである。実践内容をもっと語り続けたいとの欲望を抑えながら、メインとなる部分を中心に簡単に報告すること、聴き手に分かりやすく伝える意識を持って語ることに苦しんでいた。

研修受講者に求めた課題の難しさを身をもって体験することができ、卒業を目前にして、また新たな学びを得た1日となった。

## 長期実践報告会

スクールリーダー養成コース2年／板橋区立赤塚第二中学校 名地 太輔

長期実践報告会に参加し、自己の2年間を振り返って報告させていただきました。私がこの2年間で学びえたものは一体何であったのか、振り返って考えることができました。私が教職大学院に入るきっかけは、私が勤務する東京都板橋区立赤塚第二中学校が、板橋区より指導力向上特別研究指定校に指定され、教員の指導力向上を学校の取り組みとして行うことになり、その目的達成のために赤塚第二中学校より2名の教員が教職大学院に派遣されることになったからです。その派遣先が福井大学教職大学院でした。また、赤塚第二中学校は平成25年度より「教科センター方式」の校舎に生

まれ変わります。福井には、福井大学教職大学院の拠点校として、実績を上げている教科センター方式の学校が何校も存在していると聞いていましたので、福井大学教職大学院に通わせていただき、教科センター方式の校舎への対応や準備についても勉強させていただきたいと思っていました。そして、2年間、福井大学教職大学院に通い、勤務校を拠点とした実践的な「協働研究」や、学び合いと交流の組織化を狙ったという「合同カンファレンス」に参加して福井の学校の先生方と意見を交わし合いながら、充実した日々を送らせていただきました。2年間の私自身としての成果は、今

まで自分が自覚できていなかった教員としての「積み上げ」を、改めて整理して、「経験」という力として再認識することができたことだと思います。親しくしていただける福井の先生もできました。人のつながりは何よりの私の財産です。学校としての成果は、授業の研修が本格的にスタートしたことです。数年前までは生活指導に追われ、研修などまななぬ状態でした。いまだき研修など当たり前と思われるかもしれませんが、我々としては、研修がスタートしたこと自体、大きな成果なのです。学校が、いろいろな意味で大きく動き始めました。

このようなことを、実践記録に書き、そしてそれを報告する中で感じていました。私の実践記録は、私個人の記録ではありません。赤塚第二中学校の実践記録です。しかも、うまく書くことはできませんでしたし、実践の理論化とはほど遠い内容です。そして学校としての取り組みを書くということは、福井大学教職大学院の実践記録を書くことの意味とは、少しずれているのかもしれませんが。それでも、赤塚第二中学校は「人のつながり」で力を合わせて成長してきた学校です。そして、その人のつながりや個人ではなく我々の実践を自分なりに振り返るといことは、私にとっては意味のあることでした。

赤塚第二中学校は指導力向上、そこに含まれる授業

力向上は、いかに授業を通して生徒に学力だけではなく、人として成長させることができるか、社会性を持った人に育てることができるか、ということに着目しています。これだという1つの解答にたどり着くことは難しいのですが、大切なことは授業で協同等の取り組みを行うことにより、教師と生徒があらゆることに「気が付く」こと、人に対して「気をつかう」こと、「気を配る」こと、人に対してのケアする力を養うことだと思います。1人の人をケアするとは、その人の成長や自己実現を助けることです。そして、その過程を通して、ケアする側とされる側との間の相互の信頼は深まり合い、ケアする側の人自身も成長していくものと考えています。教師と生徒、生徒と生徒が、互いを気遣い、思いやる心豊かな絆をもって関わり合うとき、そこに互いに響き合う真の学びが生まれます。互いを思いやり、気遣い合う豊かな関わり合いの協同的・協働的な関係を作り、それを通して、情緒や規範意識が育ち、また、知識も身に付きます。「協同的な学習」の重要性はここにあります。考えてみれば、当たり前のことかもしれませんが。しかし、当たり前であり、最も大切なことに気が付くことができたのも、今回の実践記録を書くという作業と報告をする機会があったからだと思っています。

## 長期実践報告会に参加して

教職専門性開発コース2年／坂井市立丸岡南中学校インターン 永田 恭子

2月16日、長期実践報告会にて2年間の学びを報告した。質疑応答含め80分という時間のなかで、2年間を通した学びや自分の変容をどれだけ伝えることができるか、非常に不安であった。しかし語っているうちに、自分の学びや変容は自分が一番よくわかっており、読み手を意識しながら長期実践報告書を書いた経験によって、しっかりと消化できていたことに気がついた。報告することによって、改めて2年間を振り返り、自分が伝えたいことは何なのか、大切にしていきたいものは何なのかということ、より太い軸として持つことができたように思う。その後の質疑応答で渡邊教員が言われた、「原点を見つけたね」という言葉が印象的であった。教職大学院の2年間で見つけた自分の軸（私にとっての軸は「子ども理解」である）は、まさにこれから現場で一教員として働き始める私にとっての「原点」なのである。南条小学校の赤澤先生からは、「自分の軸をしっかり持って現場に入っても、忙しさ・目の前の仕事に追われてしまって、いつの間にか『うまくやりたい』に変わってってしまうことも

ある。今大切だと気付いたことを忘れないで現場に入ってほしい。目の前の子どもをきちんと見ながら、頑張る。」とエールを頂いた。報告会を通して、これまでの2年間を振り返るだけでなく、それを踏まえて、これからの展望がまた少し開けたように思う。報告会を終えて、改めて「書くこと」「語ること」の大切さを実感している。たった一日を振り返っても、考えたことは非常に多くあると思うが、それらを整理しないであれば、新しい考えにどんどん隠れていってしまう。考えるだけでは頭のなかは整理しにくく、一人で悩みや課題を解決することは難しい。しかし、この報告会やカンファレンスのように、他者に話したり、長期実践報告書のように読み手を意識して書き綴ったりすることで、自分の考えが整理されていくことを実感した。また、自分では見つけられなかった新しい視点での意見をもらえることも多々ある。そういったことを通して、これからも同僚や現場の先生方と協働し、生徒を育てるだけでなく、自分も教師としてさらに成長し続けたい。赤澤先生に言われたよう

に、目の前にいる「今」の子どもたちを見て、2年間で見つけた「原点」を大切にしながらこれからも学び続

けていきたいと強く感じた。

## 長期実践報告会に参加して

スクールリーダー養成コース1年／福井県特別支援教育センター 野村 陽子

長期実践報告会の日、雪の降る寒い日になりました。しかし、これまで合同カンファレンスで一緒にした2年生の先生方の顔が浮かび、その後実践をどのような物語にされたのだろう、今日は誰のどんな話を聴くことができるだろうというわくわくした気持ちが先立ち、大学へ向かう凍てつく雪道の1時間もあっという間に感じられました。

報告会では、附属小学校の青木先生と至民中学校の鈴木先生の実践を聞かせていただきました。お二人とも、お話をうかがうのは2回目です。以前話していらっしやったことが実践記録の展開の中ではどのように意味づけされているかを知ったり、全体のテーマや構成、内容などを決めた経緯を聞いたりすることは、今後長期実践記録をまとめていく上で大変参考になりました。

報告会では、学び合うコミュニティについて考えることができました。青木先生は赴任以来研究テーマにある「協働」という言葉に悩み、問い続けてこられました。研究テーマは学校のめざすべき姿を表していますが、新メンバーにとっては「まず言葉ありき」の借り物でしかありません。それを他の教師との語り合いや授業中の子どもの姿から、青木先生にとっての「協

働」を見出してきた過程を丁寧に語ってくださいました。組織のビジョンを示す言葉の意味を、常に問い問われる同僚性の中からビジョンが共有され、さらにその意味を深化させていくことが組織の成長なのだと考えると、組織集団の多様性は強みだと改めて考えさせられました。

そこでは自由に語り合う関係性も重要です。鈴木先生の報告では、実践の傍らに常に同僚の存在が語られていました。教師としての自分を成長させてくれる同僚へのまなざしは、尊敬と信頼にあふれています。自分とは違うからこそ、授業や子どもに向き合うとき、一人では得られない視点を与えてくれたり、逆に日頃話し合っているからお互いの実践に共感できたりすることを「喜び」と表現しておられたのが印象的でした。

玉木先生からは、「第一次産業の時代は、個人の考えは必要とされず『共同』でよかった。しかし、現代社会においては、いろいろな能力や個性をもった人たちが一つの目的に向かい知恵を生む『協働』が求められている」という話があり、帰路は職場の同僚一人ひとりの顔を思い浮かべながら、やはりあっという間の道中となりました。

## 長期実践報告会に参加して

教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校インターン 月澤 光恵

2年目の皆さんの長期実践報告を聞かせてもらうことを楽しみにしながら、今回の長期実践報告会に参加させてもらいました。皆さんの実践に触れたいですし、1年目のまとめを書き上げる際の参考にさせて頂けたらと考えていたからです。

辻本友舞先生（武生東高校）の報告の中で特に印象に残ったことは、「褒める」という事でした。人の良い所を見つけることは難しいと改めて感じました。良い行動をしている生徒は見つけやすいと考えがちでしたが、それが当たり前になってしまい、見えなくなってしまうということに気付きました。私は長期イン

ターンシップに行きながら、生徒の良かった行動や心温まる話を記録しているのですが、記録して終わってしまっている状態にあることに気付くことができました。私も少しずつではありますが、生徒がどのように育ってほしいかも考えていきたいと思いました。

また、遠藤正宏先生（丸岡南中学校）の報告の中では、記録のあり方について考え直すことができました。正直に申しまして、私は教職大学院に入学した当時、記録を書くことが嫌で仕方ありませんでした。毎日同じような日常を過ごしているのに、その記録を書くことに意味があるのだろうかと考えていたため

す。しかし、メンターの先生にお見せしているうちに、自分の欠けている所や伸ばしていくべき部分が見えてきました。メンターの先生にお見せするときは迷いましたが、自分にとってプラスになったことには変わりありませんでした。遠藤先生の報告の中では、「記録を自分に返すことができても、他人に返すことが難しい。」とおっしゃっていました。他の先生がたの負担にならないように、付箋を用いて記録を他人に返す工夫をされていたことも知りました。付箋であれば、生徒の小さいつづきも拾うことができるであ

ろうと思ひ、本当に素敵な方法であると思ひました。そして、私はこれからも記録を書くこと大事にしていきたいと思ひました。記録を書くだけではなく、記録を他の人にも見てほしいと感じるようになりました。たくさんの視点を頂いて、自分の視野を広げていきたいです。

2年目の皆さんの報告を聞かせてもらひ、自分も気合を入れていきたいと思ひます。ありがとうございました。

## 福井大学教職大学院アーカイブ

# 長期実践研究報告書一覧

長期実践研究報告書として刊行される『学校改革実践研究報告』は、これまでに171名の実践者による研究の積み上げの中で年々洗練され、充実してきました。新しい教育実践研究の論文スタイルを提案するまでに進化してきています。

No.	氏名	発刊年	タイトル（主タイトルのみ）
1	安部 康子 川崎 恵理	2003	幼児教育における異年齢交流の実践研究
2	赤澤 孝弘	2003	スポーツライフにつながる新しい体育科授業の研究
3	田代 光一	2003	反省的実践による新しい授業デザインの研究
4	余座 正之	2003	省察的授業の時間的展望における実践コミュニティの漸成展開
5	木本 茂	2004	子どもたちの科学的な探究を支える教師の省察的実践
6	田中 浩司	2004	学校改革と教師の実践共同体
7	森阪 康昌	2004	ものづくりの探究の展開と教師の反省的実践
8	向当 誠隆	2005	協働の実践を省察 再構成する力を培う社会科
9	牧田 秀昭	2005	探究するコミュニティへのプロセス
10	小野 直樹	2006	実践コミュニティとしての学校
11	石田 圭二	2006	ナラティブを用いた作業療法臨床実習の振り返り
12	市波 和子	2006	看護実践能力育成に関する実践研究
13	木田 章	2006	S T養成における実習教育を振り返ることで見えてきた『実践の中の知』
14	竹澤 勇	2006	つながりあって育つ
15	竹澤 宏保	2006	理科学習における探究活動の構成と科学的リテラシー
16	田中 秀史	2006	つながりあって育つ
17	平馬 隆	2006	私立高等学校における教育相談的対応の実践史と今後の展望
18	與河 かおり	2006	臨床実習で問題を抱える学生とそれを支える教師の役割
19	板垣 英一	2007	子どもの探求的学びの成長プロセスの省察的研究
20	及川 三枝子	2007	精神看護学実習における学生の成長プロセスの省察的研究

No.	氏名	発刊年	タイトル（主タイトルのみ）
21	荻原 昭人	2007	学校改革への挑戦
22	坂田 薫	2007	子ども・教師・保護者・地域における学びの実践研究
23	繁田 里美	2007	学生の省察を支える終末期実習改革
24	島本 幸恵	2007	授業と実習をつなげるための学びの構築
25	清水 継子	2007	個の歩みに即した実習経験の再構成
26	藤本 寛巳	2007	学びの連続性が育んだ探求心
27	渡邊 輝美	2007	省察的看護学実習と看護実践能力の育成
28	斎藤 綾	2007	探究的な授業づくりをめざす教師の協働研究の展開と実践認識の発展過程
29	澤本 恵	2007	科学的リテラシー形成を目指す探究型カリキュラムの構成と実践
30	鈴木 瑞穂	2007	生活科における協働活動と実践コミュニティの発展に関する実践研究
31	野路 拓史	2007	長期にわたる探求的な学びの実践とコミュニティの展開についての省察的研究
32	永田 賀保	2008	知識基盤社会に必要な生きる力を培うための社会科教育のあり方
33	藤井 千代美	2008	探求するコミュニティの発展過程を支える授業デザイン
34	藤下 ゆり子	2008	住民主体の地域医療システムの構築
35	藤本 裕子	2008	つながり合って育つ
36	荒川 誠	2009	学び合う学校文化の創造
37	稲津 公子	2009	人の中で生きるということ
38	宇野 泰裕	2009	学びを活用する社会科授業の創造
39	大橋 巖	2009	学びと生活を融合する中学校を創る
40	笠川 誠二	2009	通常学級における特別支援教育の実践と省察
41	川崎 正人	2009	協働によるカリキュラムマネジメントとそれを支える教師同士の学び合い
42	酒井 晴美	2009	生活教育の中で育つ
43	鈴木 秀卓	2009	授業づくりを中心に据えた協働研究の組織化
44	高橋 和代	2009	「探究するコミュニティ」における実践と思考のプロセス
45	田上 博一	2009	福井県における特別支援教育のあり方について
46	高村 祐司	2009	地域開放型学校づくりを支える新しい連携へのプロセス
47	知場 克幸	2009	教員の協働の学びを柱とした研究運営
48	塚本 康一	2009	教員研修機関における研修の充実
49	林 幸恵	2009	「伝え合い ひびき合う」関係をはぐくむ省察的実践
50	前田 良則	2009	主体的な学びの追究
51	松宮 弘明	2009	協働による授業改革を目指す
52	水持 直幸	2009	「連携」から「コミュニティ」へ
53	山田 修治	2009	病弱養護学校高等部における自立活動の在り方について
54	吉村 信彦	2009	協働を生かした学習環境づくり
55	奥山 佑	2009	コーディネーター・コミュニティの構築と実践支援
56	北嶋 慎一	2009	数学的リテラシーの形成を目指す算数・数学教育の構成と実践
57	豊谷 亜由美	2009	分散型コミュニティのデザイン
58	細谷 佳菜子	2009	教師の成長を支える「場」としての学校
59	坂本 里美	2009	高校家庭科教育における生徒の主体的学びに関する実践研究

No.	氏名	発刊年	タイトル (主タイトルのみ)
60	川端 香	2009	協同学習による学びの転換
61	鈴木 多恵	2009	言語聴覚学専攻臨床実習における段階的な目標設定から見えてきた課題
62	青柳 宏治	2010	授業で子どもを育てる教師へ
63	東 昌弘	2010	授業づくりを振り返る
64	長田 陽佑	2010	どの子にも楽しみを与えながら子どもの力を伸ばす教員を目指して
65	加納 佳晃	2010	子どもに寄り添う省察的実践の歩み
66	河合 啓子	2010	子どもと共に「楽しむ」授業づくり
67	木内 彩乃	2010	生徒の主体性を引き出すための支援について考える
68	黒川 清貴	2010	至民式問題解決型学習へのプロセス
69	鈴木 章史	2010	学びのはじまり
70	高山 星奈	2010	子どもの姿から授業をつくることの大切さを学ぶ
71	田村 晃紀	2010	“教職大学院での学び”を求めて
72	永宮 智美	2010	お互いの思いを理解し合うコミュニケーションを土台にして子どもの自発的なひろがりを支える
73	藤川 洋平	2010	『場』から『協働の場』への転換を求めて
74	村井 信吾	2010	今、求められる授業 教師はどうやって変わるのか
75	山口 敦央	2010	教師を目指すもの
76	山崎 祥子	2010	子どものコミュニケーションを支える
77	斉川 清一	2010	スーパーサイエンスハイスクール (SSH) における教員協働の実践
78	齋藤 雅宏	2010	授業づくりと教師の成長
79	佐藤 康裕	2010	同僚と共に・・・本校をよりよいものに
80	高木 健吾	2010	学び合い、高め合う学校づくり
81	竹澤 康宏	2010	病弱養護学校の進路体制作りに関する実践
82	中野 吉人	2010	教師が学び成長する学校
83	布川 洋一	2010	一教師としての実践と省察
84	政井 英昭	2010	学校での環境調整から「自立と社会参加」へ
85	安井 豊宏	2010	つながり合って育つ子どもたちとそれを支える教師の協働
86	安本 敏浩	2010	落ち着きのある温かい学校風土を創る
87	柳原 有紀	2010	「学びを拓く《探究するコミュニティ》」の実現を目指して
88	山内 康司	2010	協働コミュニティとしての理科の授業のありかたについて
89	岸本 千佳	2011	教育観を培う実践と思考のプロセス
90	北島 亜実	2011	共に学び合えるかかわりを目指して
91	小出 哲也	2011	子どもが楽しく学べる授業づくりをめざして
92	中山 侑子	2011	学ぶことが楽しい理科の授業への挑戦
93	和中 律英	2011	一人一人の子どもの学びと成長を支える授業（支援）とは
94	赤澤 達郎	2011	『子どもの学び』を追求する
95	内田 達男	2011	教師間のコミュニティの活性化と「学び合い」のある授業づくり
96	大崎 忠久	2011	特別支援教育を支える特別支援教育センター
97	勝見 浩文	2011	授業観転換のプロセス
98	川端 英郁	2011	学校における地域と連携した教育活動を双方向的につなぎ深めていくための協働研究について
99	北 典子	2011	「協働」を支える教師間の自律性と同僚性についての一考察



No.	氏名	発刊年	タイトル（主タイトルのみ）
100	高橋 彰男	2011	学校の組織化に向けた取り組み
101	高間 裕治	2011	教師が学べ、実践できる学校づくり 至民中学校教員への道
102	滝 民恵	2011	プロジェクトチームの活動と教師の協働
103	竹内 雅子	2011	養護教諭のアイデンティティとその形成プロセスを支える実践コミュニティ
104	多田 昌弘	2011	教師が協働する校内研究に向けて
105	多田 敏明	2011	学び合う同僚性が生まれる学校文化をめざして
106	辻村 完	2011	自ら学ぶ校内研修を深める・求める・広める
107	富田 裕之	2011	実践コミュニティ ものづくりから得られるもの
108	西村 美貴穂	2011	教員研修機関における研修・支援機能の充実
109	早川 勇治	2011	協働研究をデザインする
110	松井 昭男	2011	主体的に学ぶ子どもの育成を目指した学校づくり
111	宮腰 貴久	2011	教師主導型の授業からの転換と展開
112	名葉 浩行	2011	協働して学びを深める授業をつくる
113	水野 雅人	2011	長期実践で子どもの成長をたどる
114	森田 史生	2011	「探究するプロセス」を問い直す
115	内田 真希	2012	子どもとのかかわりから教師としての自己を確立する
116	内山 里香	2012	様々な関わりを通して子どもが多様な楽しさを実感できる授業の実現
117	齊川 歩	2012	子どもの思いを受け止めて関係性を築く
118	佐々木 庸介	2012	「生徒が探究する授業」を構成する省察的实践の過程
119	高村 領	2012	「人」を大切にする教師に
120	土田 真衣子	2012	子どもと共に創りあげていく教育観・授業観
121	法山 裕子	2012	子どもの力を引き出すことのできる教師を目指して
122	林 克磨	2012	「活躍できる授業」が高める学習意欲
123	森崎 岳洋	2012	生徒の学びと教師の学びとの相互作用で創る授業
124	伊東 直子	2012	中学年の授業づくり
125	見崎 洋之	2012	教師と生徒が主体的に参画する学校づくり
126	竹林 史恵	2012	「中堅」から見た、これからのリーダー像
127	金鑄 善朗	2012	至民中学校の足跡
128	宇野 秀夫	2012	地域との協働，連携でつくる
129	宮澤 啓子	2012	連携による特別支援教育
130	渡邊 朋重	2012	教科を越えた教職員の協働による研究体制の構築
131	坂下 博行	2012	教師が学び合い成長する学校をめざして
132	川畑 成央	2012	授業研究を考える
133	森北 良嗣	2012	一人ひとりの学びを協働で生み出す
134	松見 浩司	2012	伝え合い，学び合う学校づくり
135	富澤 宏二	2012	スーパーサイエンスハイスクール (SSH) における協働的活動の取組
136	島田 一博	2012	大学院での2年間の学びとこれからの自分
137	戸田 典子	2012	「互いに高め合う教師集団」をめざして
138	久島 晋	2012	生徒からの学びを基軸に据えた新たな生徒指導の種をまく
139	西尾 幸代	2012	園や学校を支える福井県特別支援教育センターの役割を協働で再考する
140	川合 浩介	2012	生徒の主体性を育てる授業を目指して
141	浅野 尚美	2012	子どもの学びとそれを支える教師の協働

## 平成24年度修了予定者の学校改革実践研究報告タイトル

[平成25年2月12日現在]

氏名	発刊年	タイトル（主タイトルのみ）
合田 優	(2013)	児童生徒理解から始まる教科指導
前田 恵子	(2013)	高等学校における「家庭科」の在り方を考える
北島 正也	(2013)	ファシリテーターとしての教師へ
辻本 友舞	(2013)	人間教師としていかに生きるか，学ぶか，交わるか
河野 紘典	(2013)	子どもとつながるコミュニティの創造
平野 貴大	(2013)	自律的な学び手をはぐくむ教育を目指して
角田 望	(2013)	生徒とともに創りあげていく教師の力量
佐々木 梨衣	(2013)	つながり合いを支える教師になるために
小島 俊祐	(2013)	私の選んだ教師としての生きる道
永田 恭子	(2013)	子どもを理解し授業をつくる
赤城 美紀	(2013)	学び合う学校文化の創造
赤澤 清和	(2013)	学び続ける学校への歩み
東 俊輝	(2013)	私学として発展する学校づくりのために
伊藤 ゆかり	(2013)	共生社会を目指す組織づくり
岩堀 美雪	(2013)	ポートフォリオを通して自己肯定感を高めるための実践の拡大とカリキュラムの開発
遠藤 正宏	(2013)	学校文化の創造と継承
岡部 誠	(2013)	個と組織のつながりを経て探究する“学びのコミュニティ”
金森 誠	(2013)	組織の活性化による研修・研究の改革
朽木 史昌	(2013)	学び続ける教師・学校をめざして
澤崎 秀之	(2013)	生徒と教師が“魅力ある自分の学校”を意識する取り組み
鈴木 三千弥	(2013)	かかわり合って育つ生徒と教師の協働
堂森 峰春	(2013)	生徒の自主性を育てる学校コミュニティ
中谷 幸子	(2013)	子ども達の「言葉」を育て「心」を育てるために
中谷 忠裕	(2013)	特色ある学び舎を支える教師集団をめざして
名地 太輔	(2013)	関わり合い，支え合う学校の創造
福岡 利夫	(2013)	協働で学び合うこと
森 克彦	(2013)	漣
青木 美恵	(2013)	協働する学びとそれを支えるコミュニティ
奥村 栄司郎	(2013)	《探究するコミュニティ》が描く学校像
柳澤 秀樹	(2013)	子どもの学びから自分の足跡をたどる

平成25（2013）年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 年間計画（1次案） 2013.2.25

4	7	10	1
1月	1月	1火	1水
2火	2火	2水	2木
3水	3水	3木	3金
4木	4木	4金	4土
5金 入学式(任意)	5金	5土	5日 長期実践研究報告作成
6土 開講式(1・2年とも出席)	6土 合同カンファレンス	6日	6月
7日	7日	7月	7火
8月	8月	8火	8水
9火	9火	9水	9木
10水	10水	10木	10金
11木	11木	11金	11土
12金	12金	12土	12日
13土	13土 合同カンファレンス 予備	13日	13月
14日	14日	14月	14火
15月	15月	15火	15水
16火	16火	16水	16木
17水	17水	17木	17金
18木	18木	18金	18土 長期実践研究報告作成 予備日
19金	19金	19土 合同カンファレンス	19日
20土 合同カンファレンス	20土 ※1aか1bいずれか一方に出席	20日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス)	20月
21日 合同カンファレンス	21日	21月	21火
22月	集中講座 1a*	22火	22水
23火	必修①	23水	23木
24水	集中講座 1b*	24木	24金
25木		25金	25土
26金		26土 合同カンファレンス 予備	26日
27土 合同カンファレンス 予備		27日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス)	27月
28日 合同カンファレンス 予備		28月	28火
29月	集中講座 2a**	29火	29水
30火	必修②	30水	30木
1水	集中講座 2b**	31木	31金 長期実践研究報告締め切り
2木		1金	1土
3金		2土	2日
4土		3日	3月
5日	4日 ***2aか2bいずれか一方に出席	4月	4火
6月		5火	5水
7火		6水	6木
8水		7木	7金
9木		8金	8土 大学院入試(第2次)(未定)
10金		9土	9日
11土		10日	10月
12日		11月	11火
13月		12火	12水
14火		13水	13木
15水		14木	14金
16木		15金	15土 長期実践研究報告会
17金		16土 合同カンファレンス	16日
18土 合同カンファレンス		17日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス)	17月
19日		18月	18火
20月	集中講座 3a***	19火	19水
21火	必修③	20水	20木
22水	集中講座 3b***	21木	21金
23木		22金	22土
24金		23土	23日
25土 合同カンファレンス 予備		24日	24月
26日	25日 ***3aか3bいずれか一方に出席	25月	25火
27月		26火	26水
28火		27水	27木
29水		28木	28金
30木		29金	1土 シンポジウム
31金		30土 合同カンファレンス 予備	2日 ラウンドテーブル
1土		1日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス)	3月
2日		2月	4火
3月		3火	5水
4火		4水	6木
5水		5木	7金
6木		6金	8土
7金 附属中研究集会		7土	9日
8土		8日	10月
9日		9月	11火
10月		10火	12水
11火		11水	13木
12水		12木	14金
13木		13金	15土
14金		14土	16日
15土 附属幼稚園公開保育研究会		15日	17月
16日		16月	18火
17月		17火	19水
18火		18水	20木 学位記伝達式
19水		19木	21金
20木		20金	22土
21金		21土	23日
22土 シンポジウム		22日	24月
23日 ラウンドテーブル		23月	25火
24月		24火	26水
25火		25水	27木
26水		26木	28金
27木		27金	29土
28金		28土	30日
29土		29日	31月
30日		30月	
		31火	

※日程は、2月末時点での予定です。来年度は、中教審答申を受けて、合同カンファレンス等の内容や時程(案:9:20~14:20)が大幅に変わる可能性があります。

報道ファイル

福井 2013年(平成25年)2月2日(土曜日)

日刊  
県民  
福井

発行所 中日新聞福井支社  
福井市大手三丁目1番8号  
電話 0776(22)0950  
〒910-0005 郵便振替 00890-0-10  
©中日新聞福井支社 2013

日刊県民福井より  
2013年2月2日  
朝刊第1面

- ※七大学とは
- ・福島大学
  - ・宇都宮大学
  - ・上越教育大学
  - ・静岡大学
  - ・和歌山大学
  - ・神奈川大学
  - ・関西学院大学

# 現場拠点の教員教育 「福井方式」全国に拡大

## 機構発足 政府予算案に計上

先進的な教師教育の手法として、福井大教職大学院と県教育委員会による「学校拠点方式」が、二〇一三年度から他県でも本格実践されることになった。国がこの「福井方式」を高く評価し、一三年度政府予算案に新規事業費を盛り込んだ。まずは福井大を除く七府県の国立・私立七大学が、それぞれの地元で学校拠点方式による教師への教育に取り組む。

福井大によると、七の大学などによる「教職大学院」の学校拠点方式は、科などがある。福井大を今後発足させ、伝え、「学校現場が大学院」のノウハウは、これら「いく」という。 (尾嶋隆宏)

学院で学ぶ現場教師ら 学院の教員がその拠点の所属校などを「拠点校」に定期的訪問。これに設定し、教職大に比べ、一部の教師に特化した大学院。実践的な指導力・展開力と、現職教員を養成する。優れた実践力・応用力を備えた中堅教員の養成が主目的。

ただでなく、学校全体の教師を交えた専門性の高い教育研究が行われる。二〇〇八年度から実施し、十二の県内拠点校を設けている。県教委との連携、現場主義、学校全体の学びの場づくりは、他県の教職大学院では見られない。昨年八月の中央教育審議会の答申でも、現職教師の能力向上の新たなモデルとして紹介されていた。四月以降に発足させる機構には、教育分野の研究者を輩出している東京大や北海道大など六国立大も参加する。研究者の卵を福井大に長期派遣し、学校拠点方式を学び、予定だという。

今回の事業期間は、一五年度までの三年間。福井大の寺岡英男理事(教育・学生担当)は「国が学校拠点方式を広めようとして、福井大教職大学院が高評価されていること、実践する大学が増えることは、福井大にとって刺激になるし、大学間の教員養成の新しい連携も生まれてくると思う」と歓迎している。

Schedule

- 3/2 sat - 4 sun 実践研究福井ラウンドテーブル  
3/14 thu 平成25年度インターンシップ事前説明会  
3/21 thu 平成24年度第2回運営協議会  
3/22 fri 平成24年度学位記伝達式

[編集後記]

節目の50号の編集を通して、福井大学教職大学院が改めてダイナミックに進化し続けてきたことに気付きます。そして奇しくもこのページの新聞記事にもあるように次年度からは活動のフィールドが全国に広がり、新たなステージを迎えます。次のステージからは、どんな景色が見えるのでしょうか。(川上純朗)

教職大学院Newsletter No.50

2013.3.2発行  
2013.3.2印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp